心理的であり公共的である意味について

三木那由他

私たちは日常においてさまざまな振る舞いによってさまざまなことを意味している。出かける子供に「きょうは雨だよ」と声をかけるとき、私たちはそれによってその子供が傘を持っていくべきことを意味するだろう。野球中継を楽しみにしている子供に同じ日本語文を発するときには、私たちはそれによって野球が中止になっているであろうことを意味するだろう。あるいは、そうした言語表現を用いずとも、片手をメモ帳に見立ててそれに何かを書きつけるような仕草をすれば、自分がメモ帳とペンを必要としていることを意味するだろう。そしてそれを目撃したひとはしばしばそうした意味を適切に理解し、適切な反応をする。

ひとがその発言や身振りによって何かを意味するという事態を表す単純な言葉があると便利だ。伝統的に、何かを意味するひとは「話者 (speaker)」もしくは「発話者 (utterer)」と呼ばれ、何かを意味するときのそのひとの振る舞いは「発話 (utterance)」、その振る舞いが向けられている相手は「聴者 (hearer)」と呼ばれてきた。こうした用語を導入したグライスは「発話 (utterance)」や「発話する (uttering)」のような表現を「人為的に拡張した仕方で」用いている (Grice 1969,

'Utterer's Meaning and Intention', in *Studies in the Way of Words*, , Harvard University Press, 1989: p. 92)。理由は明白で、日常的な用法での「発話」という表現では、なされたのが言語的な振る舞いであるというニュアンスが出てしまいがちであるが、父親が身振りで机の上のメモ帳とペンを取ってほしいと意味する場合のように、誰かが何かを意味する事例には言語的な振る舞いが関与しないものもあるからだ。グライスはこうした非言語的な振る舞いも含む仕方で「発話」を用い、また「話者」や「聴者」などについても同様の方針を採用している。もちろん本論文で同様の方針を採ってもいいだろうが、こうした用語はどうしても誤解を招きやすいものであると思われる。そこで本論文では従来「話者」や「発話者」と呼ばれたものを「発信者」、「聴者」と呼ばれたものを「受信者」と呼び、「発話／発話する」に代えて「発出／発する」という表現を用いることにする。用語の一貫性を保つために、後にグライスやその後の意図基盤意味論の議論を紹介する際にも、本論文ではこうした表現を用い続けることにする。

さて、発信者が何かを発することで何かを意味するとはどういうことだろう？　発信者が何かを発することで何かを意味することを「発信者意味」と呼ぼう（伝統的には「話者意味 (speaker meaning)」と呼び習わされている）。すると、発信者が何かを発することで何かを意味するとはどういうことかという問題は、発信者意味はどのようなときに成立するのかという問題だと言い換えられる。これは重要な問題である。というのも、何かを意味し、それを理解するということは私たちのコミュニケーションの根幹にある特徴だからである（ただしここでは「コミュニケーション」を、会話やその非言語

的な類比物を包括するものとして狭く用いており、フェロモンによる蟻の情報伝達や化学物質や電流によるシナプスの情報伝達を含むようには用いていない)。

本論文では、「信念証拠意味論」と称する立場からこの問題に答える。信念証拠意味論とは、本論文で既存の理論に対する代案として提案される見解であり、発信者が自身の信念の証拠となる仕方で何かを発するときに発信者意味が成り立つと考える。これに対し、従来の諸理論は「意図基盤意味論 (intention-based semantics)」という見解に立脚している。しかし意図基盤意味論には誤りがある。それゆえそれに代わる立場が必要なのである。

はじめの第一歩として、発信者意味が何らかの仕方で発信者の心理と関係しているはずだということを確認しておこう。このことを理解する率直な方法は、心的状態を持つ行為者が存在しない世界で、誰かが何かを意味するということが起こり得るかと想像してみるのがよい。そうした想像は困難であろう。こうしたことから、発信者意味が発信者の心理と深く関係していることは確かだ。この点で、発信者意味は心理的なのである。では発信者意味と発信者の心理は実際にどのように関係しているのだろうか？　一つの考え方は、発信者意味は発信者の心的状態の一種そのものであるというものだ。そして、これがまさに意図基盤意味論の想定である。

意図基盤意味論は、グライスによって基礎を打ち立てられた理論で、意味という概念は究極的には発信者の意図という概念によって分析されるという見解を旗印とする。発信者意味の分析について、意図基盤意味論は現時点において発信者意味に対する実質的に唯一の影響力のあるアプローチであると言ってよい。それゆえ、意図基

盤意味論が発信者意味の分析にどのくらい成功しており、どこで失敗しているのかを検討するのは発信者意味の分析を遂行するうえで最重要の課題となる。そして意図基盤意味論の検討に大きくかかわるのは、ストローソンやシファーが指摘した「意図の無限後退」問題である。

意図の無限後退問題は、ある方法に従って作られる一連の反例から生じる。後に見るように、そうした反例の最初のものはストローソンによりグライスの最初期の分析 (Grice, P. 1957, 'Meaning', in *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press, 1989: pp. 213-223) に対して提起された (Strawson, P. F. 1964. 'Intention and convention in speech acts', in *Logico-Linguistic Papers (2nd ed.)*, Ashgate, 2004: 115-130.)。ストローソン自身も論じているように、この反例そのものは分析を修正することで容易に対処できる。だが実はストローソンが反例を作ったのとまったく同じ方法によって、その修正版の分析にも反例が作れるということがわかったのである (Schiffer, S. R. 1972, *Meaning*, Oxford University Press)。さらに、修正版の分析を以前と同じ仕方でさらに修正したとしても、また同じ方法で反例が作られ、このいたちごっこは原理的に無限に続くことになる。このストローソンが与えた修正は発信者意味の分析における分析項に発信者の意図を新たに付け加えるものであったため、このいたちごっこは発信者意味の分析において発信者に無際限に多くの意図を要求するものとなる。そのため、この問題は「意図の無限後退」問題と呼ばれている。

意図の無限後退問題があぶりだすのは、発信者意味が発信者と受信者の双方にアクセス可能な公共的なものでなければならないとい

うことである。その公共性を発信者の意図を追加することで実現しようとするから、無限後退が生じてしまうのだ。従って、別の方法で発信者意味の公共性を捉えなければならない。こうして、この公共性の確保が意図基盤意味論に絶えず突きつけられる課題となった。この課題を果たすべく、グライス自身も、そして後続の世代であるシファーやハーマン、ニール、ディヴィス、グリーンといったさまざまな論者も意図基盤意味論の精緻化に取り組んできた (Grice, P. 1969. ‘Utterer’s meaning and intentions’, in *Studies in the Way of Words*, Harvard University press, 1989: 86-116; Schiffer, S. R. 1972, *Meaning*, Oxford University Press; Harman, G. 1974, ‘*Meaning* by Stephen R. Schiffer’, *The Journal of Philosophy*, *71*(7): 224-229; Neale, S. 1992. ‘Paul Grice and the philosophy of language’, *Linguistics and Philosophy*, *15*: 509-559; Davis, W. A. 2003. *Meaning, Expression, and Thought*, Cambridge University Press; Green, M. S. 2007. *Self-Expression*, Oxford University Press.)。だが結局この課題が意図基盤意味論によって達成されることはなかった。発信者意味の公共性の問題は、意図基盤意味論の躓きの石となったのである。発信者意味は心理的であり、かつ公共的である。この二つの側面を、いかにしてともに説明することができるのだろうか？　本論文の提案は、発信者意味は意図基盤意味論で考えられていたような発信者の心的状態そのものなのではなく、発信者の心的状態についての証拠に関わっているというものだ。発信者が何かを意味するとき、発信者は何かを発している。この発出は、発信者と受信者の双方にとってアクセス可能な公共的なものである。そして、発信者による発出が発信者の信念についての証拠となっているとき、この証

拠関係を介して、証拠立てられている信念もまた公共的なものとなる。これが本論文が依拠するアイデアである。発信者が何かを発することで何かを意味するとは、その発出がその発信者の信念の証拠となっているということなのである。この見解を本論文では、「信念証拠意味論」と呼んでいる。

父親が「きょうは雨だよ」と言うことで子供が傘を持って行くべきことを意味しているとはどういうことか？　信念証拠意味論によれば、父親は「きょうは雨だよ」の発出という公共的な行為をしている。そしてこの発出は、子供が傘を持って行くべきであるという信念を父親が抱いているということの証拠となっている。父親が意味することを理解する子供は、父親の発出をもとにこの証拠関係をたどり、それによって証拠立てられる父親の信念を理解しているのである。

本論文が提案する信念証拠意味論は次のように表される。

> 発信者 S が x を発することで p を意味する iff S による x の発出は S の p という信念の証拠となっている

あるものが別のものの証拠となるという関係が、前者を前提としたアブダクションの帰結の一部として後者が得られるということだと理解するならば、次が成り立つ。

> ある発信者 S による x の発出が S の p という信念の証拠となる iff S が p を信じているということが、S が x を発したということを前提としたアブダクティブな推論の結論となる

こうして定式化される信念証拠意味論は、意図基盤意味論にとって問題となる諸事例をうまく扱える。それゆえ、信念証拠意味論は意図基盤意味論よりも有力な話者意味の理論となる。また、信念証拠意味論からもたらされる帰結として、意味錯覚のような現象の説明が可能になる。信念証拠意味論はアブダクティブな推論関係を発信者意味の基礎に見出すため、発信者意味の理解を一種の知覚として理解する道を開く。これはさらに、舞台上の演技を見る場合などの私たちの理解を錯覚の一種として説明することを可能にする。

信念証拠意味論の最大の強みは、それが一見すると不可能事とも思える、発信者意味の心理性と公共性とをともに確保している点にある。すでに述べたように、発信者意味が発信者の心理と密接な関係を持つということは否定しがたい。しかしそれを重視した挙句、意図基盤意味論のように発信者意味を発信者の心理の一種と同一視するなら、そうした理論によって発信者意味の公共性を救うことはできなくなる。実際、意図基盤意味論が直面したのはそうした問題であった。他方で、発信者意味の公共性を確保した分析は、発信者の心理というものが公共性を欠くがゆえに発信者意味の心理性を確保できないかのように思える。しかし信念証拠意味論は、発信者の信念への証拠という概念を利用することによって、この一見すると相反する発信者意味の二側面をともに確保することに成功している。発信者意味は発出が持つ証拠性という公共的な基準によって成否が決まるがゆえに公共的であり、そしてその発出が証拠立てるのが発信者の信念であるがゆえに発信者の心理と密接に関わるのである。発信者意味は、心理的であり、そして同時に公共的でもある。この奇妙な特徴を説明する理論として、信念証拠意味論は従来の意図基

盤意味論的見解に対し、アドバンテージを持っている。

もちろん、信念証拠意味論に不十分な点もある。とりわけ証拠関係のより正確な理解は必要不可欠だ。そうした限界があるとはいえ、信念証拠意味論は全体として、意図基盤意味論よりももっともらしい仕方で話者意味を理解する道筋を示している。